

日吉台地下壕保存の会

会 報

第4号

発行 日吉台地下壕保存の会

編集 事務局

〒223

横浜市港北区下田町3-15-27

TEL 044-62-1282 (寺田貞治方)

目次

◎重要な局面にさしかかった保存会の活動	1
◎第6回幹事会報告	2
◎第7回幹事会報告	2
◎昭和の激動の嵐が通り過ぎて行った日吉	3
◎横浜にも平和教育学級を	4
◎時の流れに	5
◎編集後記	6



地下壕の説明に聞きいる会員

重要な局面に
さしかかった
保存会の活動

事務局長 寺田貞治

会員数は二百四十四名に達しました。保存会の活動も広がりを見せ、地下壕の展示や、見学が増えてきました。マスコミの取り上げ方も、しだいに大きくなってきました。先日、TVKの放映は十五分と長く、地下壕に関心を持つ人々も増えてきました。

区役所の職員の方も松代に行かれ、保存の実態を視察され、いよいよ保存の具体化に向けて、基礎調査のまとめの段階に入ろうとしています。

地元の関心も高く、日吉地区会議からも「地下壕の保存について」の要望書が区長宛に出され、期待されています。

多くの会員を増やし、保存会の活動を更に活発にしていきたいと思えます。今後ともよろしくご支援、ご協力をお願いいたします。

第18回

幹事会△△報告出口

十月十八日に慶應義塾藤山記念館中会議室で開かれた。オブザーバーとして区役所の職員も参加された。

○報告事項

事務局より

①団体会員として、日吉TF会より、五口(一万円)で入会申込があった。②地下壕見学実施 十月十二日港北区内中学校社会科教員二十数名、十月十五日保存会会員十五名。③地下壕見学会予定 十一月十四日大学生協東京地連中央ブロック平和交流会、十二月二日日吉台西中学校教職員・PTAOB。④「日吉台地区会議からの要望」として、港北区区長宛に日吉地区連合町内会長秋本謙三氏と区民会議運営委員四名連記で「地下壕の保存について」要望書が出された。⑤ヒアリング実施 十月十八日「海軍の組織・機構について」吉田昭彦氏(海軍戦史研究家)から話を聞く。⑥慶應藤沢キャンパス

スから地下壕発見 文化財調査委員より連絡あり。⑦マスコミ関係 十二月二日テレビ神奈川が取材予定。⑧慶應生協ニュース第四十九号に「日吉台地下壕について」民家の方の話を収録。

○議事

次の具体的活動ならびに会報第四号の発行について、次の幹事会で決めるというところで散会した。次回幹事会は十一月二十九日五時に予定。

第七回

幹事会△△報告出口

十一月二十九日に慶應義塾藤山記念館大会議室で開かれた。オブザーバーとして、テレビ神奈川の記者も参加された。

○報告事項

事務局より

①十一月一日 日吉台中学校で地域探訪会のクラブが日吉台地下壕の展示をした。②十一月四日 大学生協東京地方連合会主催の平和フェス

ティバルを渋谷会館で開いた際、中央ブロック(東大・慶應・早稲田・法政)教職委員会として日吉台地下壕の展示会をした。同時に、保存会への入会をよびかけた。③十一月十日 松代大本営の保存をすすめる会主催の十一月十一日の「第三回松代大本営の保存をすすめる集い」いま、マッシロから「に、日吉台地下壕保存の会から連帯のメッセージを送った。④十一月十一日 大学生協東京地連中央ブロック教職委員会主催の平和交流会(慶應担当)で、地下壕を見学。十二名参加。⑤十一月二十二日 慶應労組の文化祭に、日吉台地下壕の展示と、地下壕のビデオを流して保存会への入会を呼びかけた。⑥十一月二十三日

⑦十一月二十八日 日吉台地下壕に一緒に来た。来年の一月一日に新聞に掲載の予定。⑧十一月二十八日 港北区役所の職員が、松代の地下壕を視察し、長野市役所で保存の方針について調査の予定。⑨十一月二十九日 テレビ神奈川とビデオ撮りの打合せ。十二月八日「TVグラフィック42番街」で、午後八時五分から十五分間放映予定。⑩十二月二日日吉台西中学校教職員・PTAOB(森戸会)会員が、地下壕を見学の予定。このときTV神奈川も一緒に入り、ビデオを撮る。⑪十二月二日の地下壕見学会に特別参加された連合艦隊司令部幕僚付従兵であった根本和夫氏より、保存会へ一万円のカンパがあった。⑫日吉商店街情報誌「ひよし」(十月発行)のNo.11に「昭和の激動の嵐が通り過ぎていった日吉」というタイトルで、地下壕に関する記事が掲載された。この記事は本会報に転載した。

幹事より
久我氏からつぎのような報告があった。①米国から資料を取り寄せ現在調査中である。②日吉に関係する所を探し、再度資料を取り寄せて調べてみる。③米国の資料のうち、かなりのものが日本の国会図書館にもあるらしい。

○議事

①当面の活動計画について
「箕輪・日吉本町の地下壕の調査を十二月二十五日以降に行う。来年三月頃公開ヒアリングを行う。」②聞き取り調査について「朝鮮人労働者に関することが、まだ不明な点が多く、調査が必要である。」③会報第四号の発行は十二月中にやる。④次回幹事会は来年一月十七日。終了後、幹事会の新年会を行う。

○第七回幹事会後の動き

①十二月二日「日吉台西中学校教職員・PTAOB会会員が地下壕見学。三十数名参加。TV神奈川もビデオ撮りで参加。」②十二月八日「TV神奈川で午後八時五分より十五分間、地下壕について放映した。」③十二月九日「日吉地区センターで、午後一時半より日吉地区会議が開かれ、区長宛の要望事項の「日吉台地下壕の保存について」討議され、全員一致で地下壕の保存と、資料館の建設をすすめていくことを確認した。」④区役所のプロジェクトのチームの打合せを年内に行う予定。

昭和の激動の嵐が通り過ぎた日吉

寺田貞治

日吉の町が発展しはじめたのは、東横線の開通（昭和二年）と慶應大学の予科の日吉移転（同九年）がきっかけであった。これらに伴って日吉郵便局が開設（同九年）され、続いて日吉電話局も開設（同十一年）された。また、日吉の横浜合併の公約によって水道（同十三年）やガス（同十四年）が入った。昭和十六年十二月、太平洋戦争が始まるとともに日吉の街にも敗戦色が濃くなっていった。戦争も末期に近づいた昭和十九年二月、日吉の慶應キャンパスの予科校舎の一部に海軍軍司令部第三部（情報部）がやってきた。七月頃から、慶應の寄宿舎のある丘の下に連合艦隊司令部の地下作戦室の設営が始まり、九月末に連合艦隊司令部が陸に上り、寄宿舎と地下壕に移ってきた。そして、ここからレイ

テ作戦、沖縄作戦、特攻隊の出撃などの司令を出していた。

司令部の地下壕は、長さ約一kmで厚さ約四十cmのコンクリートで覆われ、幅約三〜四mのトンネルになっている。

地下壕の中は作戦室の他に通信隊や暗号隊の部屋、水洗便所、バッテリー室、空調室、長官の寝室、井戸、ジゼル発電室、冷却水槽、物資貯蔵所などがある。当時通路は、片側にベッドが他の側に物資が置かれ、一人一人やと通れるぐらいであった。また、湿気が多くて、机など反り返ってしまっただけという。

たて穴が二つあり、丘の上から地下壕までの深さは約三十mである。長官や幕僚は殆んど寄宿舎にあって仕事をしていた。食料は比較的潤沢で、当時の民間より遥かに良かったという。

情報部は、昭和二十年の始め地下壕に移った。情報部は、ここで全世界の様々な情報を受けとり、分析していたのである。当時、軍の上層部

は情報部の情報を軽視していたといわれるが、戦後米軍から高く評価されたという。昭和十九年十月に海軍水路部が工学部の木造校舎に入って情報部の印刷をしていた。

地下壕は、その後も引き続き敗戦の日まで掘り続けられた。昭和二十年三月頃から次々に、人事・経理・警備隊・航空本部などが移ってきて、それぞれ慶應の校舎あるいは地下壕にはいった。

また大聖院の裏山にも地下壕が掘られ、敗戦の日に完成した。ここは艦政本部が入る予定になっていた。蟹ヶ谷には海軍の通信隊の地下壕が、昭和十九年の春から秋にかけて掘られ、海軍のすべての部隊からの受信をしていた。当時、下田町から蟹ヶ谷にかけて木柱が林立し、アンテナが張り巡らされ、ここからケーブル線が、蟹ヶ谷の通信隊や連合艦隊司令部の通信隊にまで引っぱられていた。

地下壕の長さは、慶應キャンパス内だけで延べ二・六kmあり、日吉周辺全体では延べ五

朝鮮人労働者は、ボロボロでつぎはぎだらけの服をきて、二十四時間ぶっ通しで三交代制で、一番危険な所を掘らされていたという。また、飯も十分与えられていなかったせいか、おなかをすかし警備隊の炊炊所によく残飯をもらいにきたという。近くの農家の方も見るに見兼ねてご飯を食べさせてあげたこともあったようである。

地下壕の出入口付近の農家は海軍に強制的に土地を買い上げられ、家を移動させられ、ガタガタになった家に住まわされたあげく、空襲で焼け出されてしまった。

昭和十九年九月、日吉台小
学校の児童の集団疎開が強行

日吉台小学校は、昭和二十年四月十五日の空襲によって焼失した。この空襲で、日吉の郵便局、駅前の商店街、金蔵寺の観音堂、慶應の工学部がごとごとく焼失し、一人が死亡した。また宮前では三十軒近くの農家が焼失した。この時の攻撃は油脂焼夷弾と爆弾によるものであった。

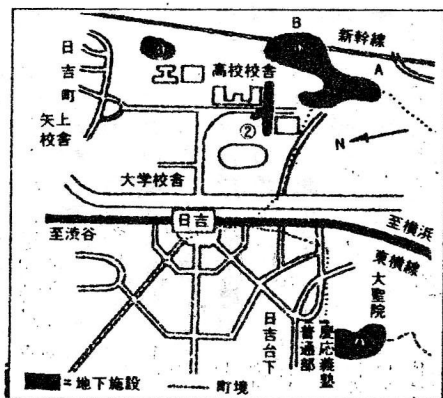
日吉地区は、大空襲が四月四日、四月十五日、五月二十四日の三回あった。四月四日の空襲では、宮前、日吉本町、箕輪町、新吉田町がやられた。宮前のある農家では、二百五十ト爆弾によって四人が死亡した。五月二十四日の空襲では、焼夷弾攻撃によって箕輪、日吉本町などがやられ、大聖院はじめ、三十軒近くの民家が焼失した。

矢上（現在の慶應工学部）には高射砲陣地があり、高射砲が三台備えつけられ、盛んに撃っていたが、飛行機まで

戦後は、米軍が日吉に進駐（九月）し、慶應の校舎に入った。日吉の町は、基地の町と化し、日吉駅周辺には米軍人相手の売春婦（当時はパンパンといった）が、夜になると何十人もたむろしていたという。家を売春宿にして稼いだ人もいた。また、米軍に掃除や炊事の仕事に雇われ、食堂の余り物をもらってきて売ったり、タバコや靴下など

を安く買い入れて売ったりして儲け、財を成した人もいた。このような状態が、米軍が慶應から撤退（昭和二十四年十月一日）するまで続いた。昭和二十三年に日吉本町自治会が結成され、二十四年には日吉駅前にマーケットが

米軍が撤退し、慶應高校・大学が帰ってきて、漸く日吉の町に本来の活気が出てきたのであった。



横浜にも平和
教育学級を

小園優子

日吉の慶應大学の下に地下壕があるらしいという話は以前から聞き知っていた。たまに一年ほど前に、「寺田先生という方が熱心に追跡調査されている」という噂を知人

から知らされ、さらに今年の春ごろ、「地下壕を歩いてきましたよ」という人の話を身近に聞いて、近いうちにぜひ入ってみたいと思っていた。そんな思いを抱いている矢先のことこの夏に、ついお隣の川崎市中原平和教育学級の主催で「謀略秘密基地、登戸研究所の謎を追う」という催しが現地（旧陸軍登戸研究所）現明治大学生田校舎で、見学を兼ねて開かれることが小さな新聞記事としてのっていた。

参加して心に残ったのは、この催しを川崎市の教育委員会が積極的に推進しているということだった。聞きなれない「平和教育学級」というのは「教育委員会が川崎市平和推進施策の一環として一九八五年度から主催している市民向け講座のこと」であり、「学級の開設には公募による企画委員会を設け、市民の手作りによるプログラムの編成」を行い「市内の七市民館では平均三年間ほどの継続事業として系統的に開設されて

いる」と、その時買収求めた中原平和教育学級編集委員会発行の『私の街から戦争が見えた』という本の巻末に書かれていた。

地下壕への誘いに初めて参加したのは十月十五日だった。素晴らしい秋晴れの日だったが、集まった十五人ほどの面々は、ズボンに長靴、帽子に軍手と、秋日和には似つかわしくない風態だった。集合場所寺田先生から、地下壕建設の着手から敗戦までのあらましと、壕の概略図の説明を受けた。

そのあと先生を先導に、手に持った懐中電灯のほのかな灯りをたよりに、壕内を实地、探索した。敗戦間際の一年間ほどの間に、海軍の司令部の根拠地にすべく、ほとんど素手とモッコで早急に掘り進められたという。鉄道工業株式会社（社長菅原通斎）という民間の会社から投入された労働者千人のうち、七百人は朝鮮人、しかも彼らは常に危険な場所を受けもたされたことだった。

時々ぬかるみに足をとられながら、しばらく歩き進んだ所で、全員一斉に灯りを消し、一分間の黙祷を捧げた。まさに真暗闇のしじまの中での一瞬、工事中に犠牲になった人々に頭をたれたのだった。やはり「ここにも朝鮮人が！」という思いは、何ともやりきれない重圧感となつてのしかかってくる。その実体についての調査も始められたばかりでのようだ。

私が川崎市の例を書き連ねたのは、私達のすぐ近くにも、こうした生々しい戦争の傷跡が放置されたままになっているということ、それらを實際にさわって歩いて感じとり戦争の本質を地域から掘り起こし、真の平和の礎にしたいと切に考えるからである。暗闇の地下壕の中を歩き回り、地上に出ると、傾きかけた陽ざしの中で、スポーツに興じる若人の喚声があちこちから響いてくる。汗のしたたかにこやかな顔で、ボール一つに全力投球している学生たち姿は、平和そのものだ。

かつて地下壕ができた頃、日吉の校舎には学徒動員で駆り出されたために学生の姿はなく、代わりにカーキ色の軍服姿のさばっていた。あれこれと、歴史を二重写ししながら、私達は帰途についたのであった。

時の流れに

仲田かよ子

太平洋戦争が終結してから四十四年。激動の昭和の時代から、今や平成の時代へと、時は移り変わった。

「国破れて山河あり、城春にして草木深し……」杜甫の白眉の詩は、敗戦を身に沁みた幾多の国民から、どれほどの共感と感銘を受けたことであろう。

二十五年前の日吉地区も、草木深い日吉の台地を中心に、低地には川が流れ、見渡す限りの田圃が展望できた。春には子供たちは、田圃の畦

道から「目高」や「オタマジャクシ」をすくって遊び、夏には「トンボ」採りに熱中、夜の「蛙の合唱」に田圃の風情を心行くまで満喫したものである。

この良き時代も、やがて押し寄せる「高度成長」の波に浸食され、田圃は次々と「マンション」、「建売住宅」の下に姿を消して行った。日吉の田圃風景は、もはや過去のものとなってしまった。

「慶応義塾」の日吉台校舎は、豊富な樹木を包含した日吉の丘にある。すでに田圃は時の流れと共に消え去ったが、「義塾」は丘と共に生き残ったのである。しかし、この「平和な丘」の「下」に、意外な構造物が静かに眠っているのを知る人は少ない。

伊藤正徳氏の名著「連合艦隊の最後」の第九章の冒頭に、「連合艦隊、陸に上がる。」の節があるが、実は、義塾の「平和な丘」の下には、連合艦隊司令部の「日吉台・地下壕」が太平洋戦争の末期、極秘のうちに構築され

ていたのである。

私が日吉の住民になったのは、昭和三十九年の暮れであるが、田圃の風情を味あうと共に、慶応義塾の丘の上をしばしば散策した。しかし、お目当ての「日吉台・地下壕」の入口は遂に発見できなかった。

平成元年十月十五日、私は念願かなって「日吉台・地下壕」の見学に参加させて頂いた。案内役は、「地下壕保存の会」の寺田先生で、「慶応義塾の丘」南側の麓にある農家の庭先に、私達は案内されたが、こんな所に壕の入口があるものかと思はず驚いた。農家の納屋が、実は「地下壕の」入口だったのである。

壕は、鉄道のトンネルを思わせる堅固なもので、その主道から「司令長官室」、「作戦室」、「通信室」等が適当な間隔を置いて、右に左に広大に切り開かれている。さすが「連合艦隊司令部」の設営した「地下壕」とは、このようなものかと、驚くと共に、なぜ、このような広大な「地

下壕」が、海軍にとって必要だったのか、の疑問も残る。この点に関して、伊藤正徳氏の「連合艦隊、陸に上がる」の箇所を参照して頂きたい。

一昨年、私は沖縄本島の「海軍司令部・地下壕」を見学したが、日吉に比べて軍艦と漁船ほどの格差を覚えた。沖縄の「素掘りの地下壕」には、海軍陸戦隊・司令官・太田大佐の最後の打電、「沖縄県民かく戦えり……」が展示され、思わず見学者の涙をそそった。しかし、「日吉台・地下壕」からは、このような感激は湧かなかった。

それは、戦争の最前線の「切実さ」と、本土の観念的な「ゆとり」との違いではなからうか。

しかしながら、共にその保存は、戦争から平和への出発点として、歴史的教訓を残すものである。

日吉の「田圃風景」の消滅、日吉の丘の「慶応義塾」、その地下に眠る「日吉台・地下壕」。私は、時の流れのなかに、「戦争と平和」、

「過去と現在」、「観念と現実」。これらの相反する認識を胸に抱いて、家路についた。

編集後記

○隔月毎に発行する当初の目標は、曲がりなりにも達成できて、ほっとしているところです。

○保存会の活動も、来年度はいよいよやまばを迎えるのではないかと思います。

○区役所のプロジェクトチームも来年の三月までに保存に向けての基礎資料をまとめて市に提出する予定になっています。

○地域住民からも区長宛に要望書も出され、保存に向けての動きが一段と増して来ました。私達の活動がいつか花開く日を夢見ながら、がんばっていきたくと思っています。

○ご意見・ご感想などありましたら、お寄せ下さい。今後ともよろしくお願い致します。

○ではよいお年をお迎え下さい。